

III 芸術的領域に関する研究

XX

日本人の音楽的才能と教育(4)

(音楽教育の限界性と可能性に関する)

実証的解明)

大阪市立大学 山 松 質 文

序説 私は音楽的才能に関しては一つの環境説の立場をとる。がそれだけに手放しの環境説に対しては批判的である。遺伝の面を或る程度固めておかないと環境説の論拠が薄弱とならざるを得ない。環境重視の教育的信念は何よりもまして尊ばれなければならぬであらうが、実証的裏付けによってその妥当性と信頼度を高めなければならぬ。

目的 音楽教育の可能性はその限界性に裏付けられねばならぬ。そのため次の諸事項を調査する。(1)音楽学習上の個人差を規定する条件、(2)音楽的才能の遺伝・環境規定度、(3)音痴の学習効果、(4)音楽的才能の発達、(5)人種差等。

結果および考察 (1)演奏学習開始の適時は五才半頃と十二才半頃と推定せられる。このことから、幼児期における音楽指導は極めて重要な意義を有するものと解せられる。(2)演奏学習開始後数か月にして早くも決定的な個人差を示し、著しい条件の変化のない限り学

習曲線は交叉することなく進む。このことから、はじめの音楽指導が特に肝腎であることを考慮する必要がある。(3)本人が正規の音楽学習者であるか否かにより音楽学習成績に有意差が示され、また家庭が優れた音楽的環境を有するもの程学習進度および質的向上が著しい。ここでいう優れた音楽的環境とは親の正規の音楽学習経験・深い音楽的造詣・優秀なる音楽的才能等を示す。家庭に楽器があるとか、本人が楽器をひいた経験があるとかいうだけで、よい音楽的条件が備わっているなどと判断することは危険である。また事実それらは本質的な条件にはなっていないことが知られる。(4)音楽学習成績と練習時間との相関(ハイオリン学習の場合)からみて、音色やハグレヨサは練習次第でよくなるが、リズム感などはそう簡単にはよくならないことが知られた。(5)統計的雙生児研究において、音楽的才能検査を試み、分散分析(名大、岸本式)によって遺伝対環境比を求めたところ、リズム判断は他の要因に比べて遺伝規定度が、強弱判断は環境規定度が大きい傾向が見られたが、高低判断・時間判断・音記憶等はその点不確実である。一般には環境規定度は遺伝規定度に優先する傾向がみられる。ここで再びリズム感が何れかといえは素質的なるものであることと共に、一般的には音楽的環境の重要性が示唆されたように思われる。(6)家系調査法では音楽的才能の遺伝を肯定せざるを得ないような顕著な事例がみいだされた。ここで一般的に遺伝も無視できないことを再び考慮しなければならぬ

くなくなった。(7)家系調査法では世代を重ねるに従って才能の顕著なる向上が音楽的優秀家系に示された。ここで素質と環境との相乗的効果が如実に示されたようである。(8)高度の音痴の兄弟について学習を試みた結果は、学習効果が素質のみならず動機付けにも大いに関係することが示された。(9)小・中・高校生四〇四名に対してシューア・テストを試み、分散分析を行なった結果は、音色判断以外は性差がなかった。ここに女兒が一般に音楽がよくできるという考えや現実はその通りであったりすることに對しては、何らかの教育的配慮が必要であると思われる。(10)同上調査において小学生と中学生との間には音楽的才能の発達上から一つの明確な一線が引かれる。音色判断は発達の傾向が不明瞭であるが、長短・音記憶判断また特に強弱判断は発達の傾向が明確であり、高低判断はその中間に位置する。これにより音楽的才能の発達には、一般には飛躍点があることが知られた。(11)日本人は米国人に比し、長短判断は一般に優位、リズム判断は小学生のみ優位であるがそれ以上の年齢水準では劣位、強弱・記憶・高低はこの順に劣り、音色はかなり劣る。近時我が国の音楽教育特にリズム教育がその困難にもかかわらず、幼稚園を筆頭に普及徹底した結果と思われる。(大会発表論文抄録84—85頁)

動きのリズムの評価に

関する一研究

(幼稚園児を対象として)

大阪・菅南幼稚園 橋 本 暢 子
大阪市立大学 山 松 質 文

序説 リズム指導の要諦は、表面的なりズム運動自体を直接扱うことよりは、むしろ幼児との人格のふれ合いから、保育者のあたたかい心と鋭い洞察によって幼児の生活そのものをまず受け入れてやることから始まるともいえよう。

また下記の動きのリズムの評価をはじめ諸検査並に評価を通じて、人格形成との連関のもとに、保育上の障害の発見とその除去から更に保育効果の促進へと向かわねばならぬと考える。このため、動きのリズムの評価の妥当性と信頼度をたしかめる必要があるのである。

さて米国の音楽教育家ムアセル (Muesel) によれば、リズムは表現的な身体運動である。従ってリズムの本質がその表現にあるのであるから、必ずしもそのリズムミカルな刺激は外部から来るものだけに限らない。例えば、音楽刺激を伴わなくても心の中のもの、希望・興奮がそのまま動きとなって現れてくればよく、従って音楽のリズムはむしろその特殊化したものといえよう。またトリス (Tolls) によると、子どもは音よりもリズムの方に心がひかれるといわれるが、幼児のリズム指導は「動きのリズム」を主体としてそれと結びつけたある時は平行して、歌唱、演奏にみられるような狭義の音楽のリズムの指導をすべきであり、リズムは運動、なるべくは、全身運動によって大きな動きを筋肉の中に感じるのがよく、従って幼児の指導には特に動きのリズムに重点をおいて行なうべきであると思われる。

リズム指導にあたっては、準備的指導を経ないで直ちにそれに入るのが自然なやり方であろう。例えば、速度感・メトロノームの能力のみで、リズム感を評定してはならぬと思う。

対象 H幼稚園の保育時間を借りて数か月指導することにより、